

## 東京都における令和元年度のスモン患者検診

中嶋 秀人（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

小川 克彦（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

里宇 明元（慶應大学医学部リハビリテーション医学教室）

大竹 敏之（財団法人東京都保健医療公社荏原病院神経内科）

### 研究要旨

東京都における令和元年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。令和元年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。受診患者数は16人（男性；5人、女性；11人）であった。年齢は1人を除き65歳以上の高齢者であった。診察場所は、14人が来所、2人が訪問であった。発症年は「昭和40～44年」が12人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」に多かった（9人）。発症年齢は13人が10歳以上であったが、幼少時発症（0～4歳）が1人にみられた（無回答2人）。発症時：視力障害の程度は、視力低下の目立つ「明暗のみ」～「眼前指数弁」が4人であるのに対し、「ほとんど正常」と「軽度低下」が11人と多かった（無回答1人）。歩行障害は全例にみられ、「不能」が9人と多く、「つかまり歩き」の6人が次いでいた。令和元年度：視力合併症は13人にみられた。視力の程度では、10人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、5人は「新聞の大見出しが読める」状態で、1人は「眼前手数弁」の状態であった。下肢筋力低下では「なし」～「軽度」が9人で、中等度以上は7人であった。歩行障害は全例にみられ、重症の「不能」と「車椅子」はそれぞれ1人で、「一本杖・松葉杖」が7人と多く、「つかまり歩き」が3人と次いでいた。外出では、「近く/遠くまで一人で可能」が10人と軽症例が多く、「不能」～「車椅子」は6人であった。体幹・下肢の表在感覚障害は15人にみられ、14人は末梢優位性を伴っていた。触覚異常（低下）は15人にみられ、痛覚異常も15人にみられた（低下；14人、過敏；1人）。下肢振動覚障害は全例にみられ、中等度以上の障害が13人と多かった。異常感覚は14人にみられ、程度は7人が中等度～高度であった。その内容では、「しめつけ・つっぱり感」（7人）と「じんじん・びりびり感」（9人）が多かった。軽度の下肢皮膚温低下が12人にみられ、自覚的な下肢冷感5人にみられた。尿失禁は10人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が10人と多く、不変は3人で、悪化は1人と少なかった（無回答2人）。「10年前からの経過」では不変が4人、軽減が5人、悪化は6人になっていた（無回答1人）。身体的合併症は15人にみられ、白内障（11人）が多く、高血圧症が9人、脊椎疾患が8人であった。障害要因は、「スモン単独」が4人で、「スモン+合併症・加齢」が12人と多かった。療養状況は在宅が13人と多く、診察時の重症度では重度例は3人と少数で、中等度が10人と多かった。治療は全例で受けており、スモン治療は7人で、合併症治療は10人であった。治療の内容は12人が内服加療で、8人がマッサージであった。「最近1年の転倒」は9人にみられ、「倒れそう」も6人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が11人で、屋内で主に

生活している5人よりも多かった。介護の有無では、要介護が12人で「必要なし」の2人よりも多かった。発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和元年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善している例が多かった。感覚障害は多くの例でみられており、異常感覚が多くの例で現在においても残存していた。また、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現況がみられた。

## A. 研究目的

東京都における令和元年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

## B. 研究方法

令和元年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

## C. 研究結果

### 1. 患者の内訳

受診患者数は16人（男性；5人、女性；11人）であった。年齢は1人を除き65歳以上の高齢者であった。診察場所は、14人が来所、2人が訪問であった。

### 2. 発症時の所見

発症年は「昭和40～44年」が12人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」に多かった（9人）。発症年齢は13人が10歳以上であったが、幼少時発症（0-4歳）が1人にみられた（無回答2人）。視力障害の程度は、視力低下の目立つ「明暗のみ」～「眼前指数弁」が4人であるのに対し、「ほとんど正常」と「軽度低下」が11人と多かった（無回答1人）。歩行障害は全例にみられ、「不能」が9人と多く、「つかまり歩き」の6人が次いでいた。

### 3. 令和元年度の所見

#### (1) 臨床所見

栄養状態では、「ふつう」の12人が最多であった。体格も10人が「ふつう」であり、「軽度やせ」は5人にみられた。「肥満」は1人のみであった。食欲は、「ふつう」の10人が多かった。睡眠では、「不眠」が12人にみられ、「ふつう」は3人と少なかった。「過眠」が1人にみられていた。

視力合併症は13人にみられた。視力の程度では、10人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、5人は「新聞の大見出しが読める」状態で、1人は「眼前手数弁」の状態であった。下肢筋力低下では「なし」～「軽度」が9人で、中等度以上は7人であった。下肢の痙縮は8人にみられた。下肢の筋萎縮は12人にみられた。握力低下は13人にみられた。上肢の運動障害は8人にみられた。歩行障害は全例にみられ、重症の「不能」と「車椅子」はそれぞれ1人で、「一本杖・松葉杖」が7人と多く、「つかまり歩き」が3人と次いでいた。外出では、「近く/遠くまで一人で可能」が10人と軽症例が多く、「不能」～「車椅子」は6人であった。起立位は、12人が「一人で立てる」状態であったが、4人は「不能」または「支持を要する」状態であった。Romberg徴候は12人にみられた。上肢の感覚障害は8人にみられた。体幹・下肢の表在感覚障害は15人にみられ、14人は末梢優位性を伴っていた。触覚異常（低下）は15人にみられ、痛覚異常も15人にみられた（低下；14人、過敏；1人）。下肢振動覚障害は全例にみられ、中等度以上の障害が13人と多かった（高度；12人）。異常感覚は14人にみられ、程度は7人が中等度～高度であった。その内容では、「しめつけ・つっぱり感」（7人）と「じんじん・びりびり感」（9人）が多かった。その他、「冷感」が5人にみられ、「痛み」が3人にみられた。「足底付着感」は2人と少数であった。感覚障害のレベルでは、臍部が6人と多く、鼠径部が4人と次いでいた。乳腺は3人であった。膝・足関節がそれぞれ1人であった。レベルが明らかでないものも1人にみられた。軽度の下肢皮膚温低下が12人にみられ、自覚的な下肢冷感も5人にみられた。尿失禁は10人にみられた。大便失禁は尿失禁よりは低頻度であったが、「ときどき」が5人にみられた。胃腸症状では、「下痢」は3人と少なく、「常に便秘」が6人

にみられ、「下痢・便秘交代」が4人にみられた。膝蓋腱反射では、「亢進」が7人、「低下～消失」が9人であった。アキレス腱反射では、「低下～消失」が13人と多かった。Babinski 徴候は6人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が10人と多く、不変は3人で、悪化は1人と少なかった（無回答2人）。「10年前からの経過」では不変が4人、軽減が5人、悪化は6人になっていた（無回答1人）。

#### (2) 合併症・治療など

身体的合併症は15人にみられ、白内障（11人）が多く、高血圧症が9人、脊椎疾患が8人であった。他には、脳血管障害が2人、骨折が6人、四肢関節疾患が4人、腎・泌尿器疾患が6人、パーキンソン症候が2人にみられた。精神徴候は12人にみられ、不安・焦燥が8人と多く、抑うつも5人にみられた。認知力では、記憶力低下が8人にみられ、認知症も2人に診断されていた。障害要因は、「スモン単独」が4人で、「スモン＋合併症＋加齢」が12人と多かった。療養状況は在宅が13人と多く、診察時の重症度では重度例は3人と少数で、中等度が10人と多かった。治療は全例で受けており、スモン治療は7人で、合併症治療は10人であった。治療の内容は12人が内服加療で、8人がマッサージであった。注射を行なっている例はなかった。他には、外用薬が2人、漢方薬が3人、ハリ灸が2人であった。

#### (3) 主に生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は9人にみられ、「倒れそう」も6人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が11人で、屋内で主に生活している5人よりも多かった。食事と起き上がりはともに12人が「自立」であった。トイレ動作は14人が「自立」であった。入浴は10人で「自立」であった。平地歩行では「自立」が6人であった一方、介護必要例が10人になっており、このうち3人は「全介助」であった。階段昇降では、8人が「自立」であったが、8人では介助を要し、このうち6人は全介助であった。入浴は、10人は「自立」であったが、6人では介助を要し、いずれも「全介助」であった。介護の

有無では、要介護が12人で「必要なし」の2人よりも多かった。要介護度では、要支援が6人なのに対し、要介護は5人となっていた（無回答5人）。この内容に対しては、「概ね妥当」と考えているのが4人である一方、「低い」と考えている例は5人にのぼっていた（無回答5人）。身体障害者手帳は、1～3級が12人と多かった。通院方法では、自動車・電車・バスが12人と多かったが、独歩は2人と少なかった（無回答2人）。通院時間は1時間以内が11人と多かった。付き添いは5人にみられた。訪問介護は4人で利用されていたが、訪問看護と訪問リハビリはそれぞれ2人であった。

#### D. 考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和元年度では歩行障害の程度は発症時に較べると改善している例が多かった。外出可能例が多い一方で、歩行障害は全例に確認され介助を必要とされる例が多かったことから、歩行や移動する際に制限がある現況が確認された。感覚障害は多くの例でみられており、触覚・痛覚・振動覚の障害と末梢優位性が高頻度に見られた。感覚障害の程度では、振動覚で高度障害例がもっとも多かった。また、自覚的な異常感覚が多くの例で現在においても残存していた。また、スモンによる後遺症に加え、白内障や脊椎関節疾患などの加齢に伴う併発症が障害要因になっている現況がみられた。

#### E. 結論

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和元年度では、歩行障害の程度は発症時に較べ改善している例が多かった。感覚障害は多くの例でみられており、異常感覚が多くの例で現在においても残存していた。また、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現況がみられた。

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし